



三島由紀夫戯曲研究——戦後演劇と文学の対話——

霍, 思静

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2025-09-25

(Date of Publication)

2027-09-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第9276号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100498316>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

論文題目

三島由紀夫戯曲研究——戦後演劇と文学の対話——

氏 名 : 霍 思静

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名	(主)	梶尾文武	准教授
	(副)	樋口大祐	教授
	(副)	大橋完太郎	教授

要 旨

一九五〇年、三島由紀夫は文学座に接近したことを契機とし、俳優座的な時代風俗の写実を基調とする一九四〇年代の創作劇から一転、謡曲の翻案という形で古典主義的志向を示した『近代能楽集』を発表するに至った。三島はその後、演劇活動の軸足を古典への回帰へと移してゆく。三島戯曲に関する先行研究は、主に五〇年代以降の戯曲を対象とし、セリフの修辞や演劇的表現力に着目するものが多く、詩劇あるいはシアトリカルな理論的射程を形作ってきたと言えよう。しかし見落とされがちなのは、「戯曲の人物は最大限にお喋りである」¹とする成熟期の戯曲文体の確立以前、すなわち初期戯曲群に向けられるべき眼差しである。

初上演作「火宅」について、三島自身は「動きの少ない芝居なので動きをつけるためにいろいろと小手先のわざとらしい技巧を弄してゐる。さういふところが自分で読みかへしてみても厭であつた」と述懐しており²、矢代静一は「彼の劇作家としての力量が、まだ開花していない」と評する³。また、堂本正樹も「貧相な現代劇で大いに落胆した」と酷評している⁴。翌年に発表された「燈台」（『文学界』一九四九年五月）についても、堂本は「ト書きの指定にその心理の多くをあずけた文体も、未だ所謂「三島調」以前のもどかしさと、稚々しさが匂うのだ」と指摘している⁵。いわゆる「三島調」以前の初期戯曲の多くは、しばしば劇作上の未熟さを理由に失敗作として閑却され、長らく検討の埒外に置かれてきた。

本論文では、そうした転換点以前に位置する一九四〇年代の初期戯曲において、一貫して描かれる戦後の家族という主題に着目し、それを同時代の社会的歴史的言説や戦後演劇の周縁的文脈との関係において考察する。さらに、小説という隣接ジャンルとの照応にも目を配りつつ、『近代能楽集』以降の展開を視野に入れることで、一九四〇年代の初期戯曲と一九五〇年代半ばまでの戯曲群とのあいだの主題的な共通性およびその変容のあり方を明らかにし、戦後日本における演劇と文学の相互的關係を架橋しようとするものである。

本論文の第一部では、一九四九年に発表された家庭劇二作を取り上げ、それらにおける戦後表現のあり方を考察する。第一章は、三島由紀夫の劇壇デビューを演劇史的文脈の中に位置づけ、その意義を再考する。加藤道夫の「挿話」と三島の「弱法師」を取り上げ、戦後の劇作家たちがいかに戦争を主題化したかを手がかりに、両者の関係と表現の差異に光を当てる。第二章では、「火宅」を対象とし、三島がいかにして岸田國士およびチェーホフの系譜を継承し変奏したかを考察する。三島は、劇壇への初陣として「火宅」を創作するにあたり、「何の事件も起らない芝居を書いてみたい」と述べている。これは、事件らしい事件が生じてこない岸田國士の戯曲の特徴と重なり合う。本作において登場人物たちは事件の発生可能性をめぐって論議を重ねるが、実際には事件が発生するのは「何も起こらない」大里家

の外部においてである。この章は、一九六〇年代における三島の言説を参照しつつ、劇的な事件の不在という観点からアンチ・テアトルの概念を再検討する。岸田の「紙風船」と比較しながら、とくに千賀子の劇的役割に注目することで、「火宅」における劇的行動が如何に作用し、アンチ・テアトルとしての特徴がどのように表出されているかを明らかにするものである。

「火宅」からの継続とも言えるように、一九四〇年代後半の三島の戯曲はいずれも家庭を主題とし、戦後家族の崩壊を描く点に特徴が見られる。一九四七年の民法改正によって「家」制度は法的に廃止され、またGHQの主導によって制定された新憲法も、戦前の天皇制と家父長制的秩序の基盤となっていた明治民法の「家」制度を否定し、個人の自由と平等に基づく新たな社会体制への転換を志向していた。三島の初期戯曲が、戦後家族の崩壊を主題として取り上げていることは、まさにこうした制度的価値的転換の影響を反映している。第三章では「燈台」を対象に、舞台となる大島三原山の歴史的意義に留意しつつ、戦後の混乱した家族関係が作中にいかに描かれているかを、昇と正子の兄妹関係に焦点を当てながら、同時代の社会的歴史的な文脈の中で考察する。

本論の第二部では、一九五〇年代の『近代能楽集』のうち三作を取り上げ、戦後初期の家庭劇から、舞台上における女性表象への関心の移行を検討する。第四章では「綾の鼓」を対象に、作品解釈の重心を主人公の岩吉から彼を幻惑する華子のほうに移し替える。月の桂を思わせる神聖な姿で登場する貴婦人華子は、後半で三日月の刺青を持つ売女として描かれるが、その転落は「真心のない男たち」によってもたらされたものである。華子はその転落を通じて力と主体性を獲得し、男の欲望が女に投影され、女の美を目撃した男はそのことによって女に復讐されるという構図のもと、岩吉の行為とは対照的な変貌を遂げる。このような転落から神聖性への転換の劇のなかに、本作のジェンダー的力学が潜んでいることを論じた。第五章は「卒塔婆小町」を対象に、地理的な位置関係と執筆期間の歴史事件に照らして本作の公園は、戦後GHQに占領されていた日比谷公園と主張する。日比谷公園は、第一の開国＝鹿鳴館期と第二の開国＝占領期とを重ね合わせ、二重化された占領空間を背負った本作の舞台構造となる。このような舞台に現れる火のイメージと舞踏会の表象を解明することで、主人公老婆と詩人の内実を明らかにし、従来、詩劇あるいは観念劇として捉えられてきた「卒塔婆小町」が占領空間を刻印する作品と再評価した。

第六章では、「班女」を短編小説「果実」と併せて取り上げる。「班女」は、堂本正樹によれば、「執筆当時の社会情勢・事件などから完全に独立した、象徴性を獲得して」おり、「最も「能」的であり、「時代を超えた普遍と古典性」を備えた作品であるとされている。この章は、これまで見過ごされがちだった女性たちの愛のあり方に注目し、「班女」と「果実」に共通するレズビアニズムの構図が繰り返し描かれていることを論じる。戦後文学でレズビアン表象がしばしば性的描写に偏重する傾向にあっ

た中で、この二作は例外的に女性の心理と愛の構造に光を当て、彼女たちがいかに自己の欲望を構築していくのかを明らかにする。

最後に第三部では、三島の演劇活動と周辺演劇人に注目する。第七章は、戦後演劇の系譜を辿りながら「雲の会」が創刊した雑誌『演劇』に着目し、連なる演劇評論を考察すると同時に、文学座、「雲の会」に入会する三島の一九五〇年代の創作軌跡について考察するものである。「雲の会」の文学者は、能や歌舞伎という古典芸能への関心を共有していた。三島の古典主義の一環となる日本古典の様式は、これら古典芸能を戦後新劇に再生させた「雲の会」の活動と並行して三島演劇の中に消化吸收されていた。付録一には雑誌の総目次と執筆者一覧を付す。付録二では、劇詩人としての中村真一郎の演劇活動および演劇論を概観するとともに、詩劇に傾倒した劇作家としての中村、加藤道夫、三島由紀夫の表現上の差異にも注目する。

以上、本博士論文の問題意識と構成を概観してきた。本論は戯曲テキストの考察を軸としつつ、小説という隣接ジャンルにも目を向け、副題に掲げた「戦後演劇と文学の対話」のもと、本来は一体であるべきでありながら分断されがちな演劇研究と文学研究を改めて架橋しようとするものである。また、三島の演劇を、作家研究としての個別的な問題にとどめるのではなく、戦後演劇史の文脈に位置づけ、その影響の往還関係を動的に捉えることで、三島研究に新たな視座を提示することを試みたい。

-
- 1 三島由紀夫「小説とは何か（八）」（『波』一九六九年十一月→『決定版三島由紀夫全集③④』新潮社、二〇〇三年九月、七二五頁）
 - 2 三島由紀夫「「火宅」について」（『日本演劇』一九四九年四月→『決定版三島由紀夫全集②⑦』新潮社、二〇〇三年二月、一七八頁）
 - 3 矢代静一『旗手たちの青春 あの頃の加藤道夫・三島由紀夫・芥川比呂志』新潮社、一九八五年二月、七二頁
 - 4 堂本正樹『三島由紀夫の演劇：幕切れの思想』劇書房、一九七七年七月、一八二頁
 - 5 堂本正樹『三島由紀夫の演劇：幕切れの思想』前掲、一二一頁

論文審査の結果の要旨

氏 名	三島由紀夫戯曲研究——戦後演劇と文学の対話——		
論 文 題 目	霍 思 静		
要		旨	
本論文は、三島由紀夫の作劇法の特徴を明らかにすべく、『近代能楽集』所収作を中心とする一幕物の戯曲作品に集中的な考察を加えた研究である。論文全体を通して、三島戯曲の主題や方法が、戦後社会、あるいは戦後演劇とどのように関係していたのかが検証されている。論文全体の問題意識と概要を示した「はじめに」に続く本論は、三部七章および付録二篇から構成されている。 第一部「戦後の家庭劇」では、青年時代の三島が手掛けた一幕物の家庭劇が主な考察対象とされる。占領時代の三島の戯曲は多くが家族の崩壊を描いているが、そこには戦後における家族制度の転換の影響が反映されている。このように指摘する著者は、論全体への導入的な意味をもつ第一章において、三島の劇壇デビューを演劇史的文脈の中に位置づけ、その戯曲創作の意義を再考すべく、加藤道夫の「挿話」と比較しつつ三島作品を考察する。著者の指摘によれば、三島が演劇において戦争を主題化したのは、やや遅れて「弱法師」をもって嚆矢とする。「挿話」との比較を通じて、三島演劇が戦争の表象不可能性に直面していたことを明らかにしている。 第二章は「火宅」を論ずる。作品の分析を通して、三島が岸田國士の創作劇およびチューホフの翻訳劇の系譜を継承し変奏していたことが明らかにされる。三島は、劇壇における初陣として「火宅」を創作するにあたり、「何の事件も起らない芝居を書きたい」と述べていたが、これは事件らしい事件が生じてこない岸田戯曲の特徴と重なり合う。このように指摘する著者は、1960年代における三島の新劇批判を参照しつつ、劇的な事件の不在という観点からアンチ・テアトルの概念を再検討している。岸田の「紙風船」と比較しながら、とくに千賀子の劇的役割に注目することで、本作のアンチ・テアトルとしての特徴を解明している。 第三章では「燈台」が論考の対象となる。舞台となる大島三原山が占領時代において有した意味に留意しつつ、作中に描かれた混乱した家族関係を、復員兵の表象や兄妹関係、女子教育の問題、父の欺瞞に焦点を当てながら考察している。幕切れにおける妹・正子のセリフに、著者は「制度のために倫理の光を演じ続けねばならない抑圧」を見出し、作品をジェンダー批評の観点から解釈している。関連作品に「聖女」「ニオベ」があるが、本格的な考察については今後の課題であることが示唆されている。 第二部では、1950年代の『近代能楽集』のうち三作を取り上げ、家庭劇から古典翻案劇へと転換した三島作品のなかに、同時代的な主題、とくに戦後的な女性像が描き込まれていることの見地から、それらについての具体的な検討が試みられている。第四章で取り上げられるのは、「綾の鼓」である。著者はここでは、作品解釈の重心を主人公の岩吉から彼を幻惑する華子のほうに移し替え、華子の転落を力と主体性を獲得する過程として捉え直している。このような女性の転換の劇のなかに、本作のジェンダー的力学が潜んでいることが明らかにされている。 第五章は「卒塔婆小町」を論ずる。本作が舞台とする公園を、戦後GHQに占領されていた日比谷公園と同定する著者は、ここに第一の開国＝鹿鳴館期と第二の開国＝占領期とを重ね合わせ、二重化された占領空間を見て取る。さらに、主人公老婆と詩人の関係を分析し、従来は専ら観念劇として捉えられてきた本作を、占領空間を刻印した作品として再評価している。			
		主査記載 氏 名	樋口 大祐

第六章では、「班女」を短編小説「果実」と併せて取り上げる。両作はいずれもレズビアニズムを主題としているが、性的描写に偏重する傾向をもつ戦後文学の女性同性愛表象とは異なり、両作は女性の心理と愛の構造に光を当てている。このように論ずる著者は、作中の女性たちが自己の欲望を構築していく過程に、ラカン派精神分析やジュディス・バトラーの構築主義を参照しつつアプローチしている。

第三部では、三島の演劇活動と周辺演劇人に注目した、いわば資料編である。第七章は、戦後演劇の系譜を辿りながら「雲の会」が創刊した雑誌『演劇』に着目し、連なる演劇評論を考察すると同時に、文学座、「雲の会」に入会した三島の1950年前後の創作の軌跡について考察している。「雲の会」の文学者は、能や歌舞伎という古典芸能への関心を共有していた。三島の古典主義の一環となる日本古典の様式は、これら古典芸能を戦後新劇に再生させた「雲の会」の活動と並行して三島演劇の中に消化吸收されていった。本章ではこのような動向を『演劇』の解題を通して明らかにしている。付録一には雑誌の総目次と執筆者一覧を付す。付録二では、劇詩人としての中村真一郎の演劇活動および演劇論を概観するとともに、詩劇に傾倒した劇作家としての中村、加藤道夫、三島由紀夫の表現上の差異を指摘している。

このように本論文は、三島由紀夫の戯曲作品のなかでも一幕物を考察の中心に据え、その作劇法の本質を解明しようとしている。ただし、ここで記述された三島の作劇法が、多幕物においてどのように展開されているのかについては、明らかにされていない。また、三島の小説のなかでも代表作に属する長篇群についてはほとんど考察の埒外に置かれているため、本論文をもって三島文学の本質に迫りえていると直ちには評価しがたい。いずれも今後の課題となるだろう。

しかし本論文は、三島戯曲の考察を通じて演劇研究と文学研究を改めて架橋しようとする意図のもとに展開されている。また、三島の演劇を、作家研究としての個別的な問題にとどめるのではなく、戦後演劇史の文脈に位置づけ、その影響の往還関係を動的に捉えることで、三島研究に新たな視座を提示している。分析にあたっては、とくに女性の表象に注目し、戦後社会における解放と抑圧の力学になかに置かれた女性身体を考察の俎上に載せることによって、作品に潜勢するジェンダー批評的な問題意識を可視化しえている点も評価に値しよう。

上記のような評価に鑑み、本審査委員会は、学位申請者・霍思静が、博士（文学）の学位を得る資格があるものと判断した。

審査委員

区 分	職 名	氏 名	区 分	職 名	氏 名
主 査	教授	樋口 大祐	副 査	准教授	梶尾 文武
副 査	教授	大橋 完太郎	副 査	広島大学 名誉教授	有元 伸子
副 査	准教授	有澤 知世			